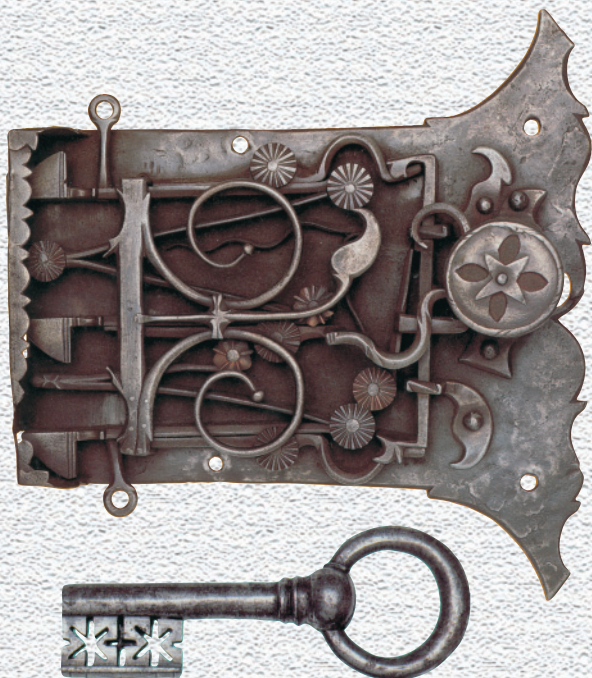


Steel Landscape

鉄の点景

錠前



中世ヨーロッパのウード錠と鍵

かつて西欧では財産が多いほど、また地位が高いほど、たくさんの鍵を持つことになるという時代があった。日本人にはなかなか理解できない感覚だが、「鍵・錠は善くも悪くも、その地域の歴史を反映する」という。日本でも鍵・錠は独特な変遷をたどっている。



日本独自の江戸期の錠と鍵



最新の南京錠

世界に広まった南京錠

日本の錠の歴史はいわゆる「南京錠」に始まっている。日本では外国を「南京」、「唐」などと呼ぶ時代があり、当時外国から渡ってきた品物に「南京」や「唐」などの形容がつけられた。だが、これは必ずしも生産地を表わすものではなく、南京錠の発祥は定かでない。

中国の装飾や漢字が刻まれた南京錠は古代ローマ帝国の遺跡からも発見されている。また、パキスタン、イスタンブール、カイロの博物館に陳列されているものは、正倉院にある南京錠とほぼ同じものだという。南京錠はシルクロードを通して世界に広まったのだろうと想像される。紀元前2世紀にはすでにかなりの完成度に達していたという。

南京錠は扉の外側に取りつける金属製の錠で、錠の腕を引っ掛け、穴に腕を押し込むと施錠される。開けるときは鍵穴に

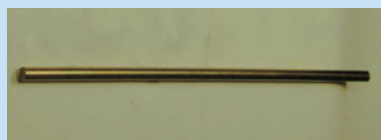
金属製の鍵を差し込む。これが基本的な機構である。中世のヨーロッパでは南京錠のなかに回転するタンブラーを組み込んだり、見せかけの鍵穴を作るようになる。イランでは左右から鍵を差し込まないと開錠しないものが作られる。このように南京錠は世界に広まった後、それぞれの地域で異なった発展をとげている。

もちろん、南京錠がすべての錠のルーツだったわけではない。古代エジプトやギリシャの神殿にも鍵・錠が使われている。多くの民族を抱えるヨーロッパでは常に侵入される危険があり、鍵・錠は必要不可欠なものとして社会に深く根を下ろしていた。ヨーロッパでは鍵は信頼を象徴し、天国の扉を開けるとさえ言われている。

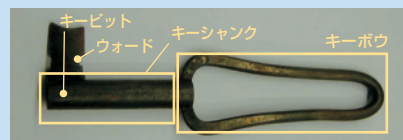
江戸時代までの日本の錠

1998年2月、大阪の野々上遺跡で日本最古の錠が発見さ

■鍵（特注品）の製造工程例



丸棒銅



完成品



①鉄の丸棒を叩いて曲げ、キーボウの形を成形する。



②キーボウの接合部を蝋付けし、やすりで仕上げる。



③成形したキーシャングとキービットを固定し、蝋付けする。



④やすりで仕上げた後、キーボウとの接合部に溝を入れる。



⑤キーボウをキーシャングの溝に叩き込む。



⑥蝋付けの後やすりで仕上げ、ウォードを作る。



⑦鉄を焼き、油につけ、色味を整えて仕上げる。

れた。鉄製の長さ約17cmの錠は、7世紀半ば頃につくられたものと推定され、その技術の高さが注目を集めた。これは南京錠のなかでも特に「海老錠」といわれるタイプのもので、旋錠時は弦状の板バネが錠内部に引っ掛け、解錠時には横から棒状の鍵を差し込むことで、なかの板バネを押し込めて引っ掛りを外し、錠が開く仕組みになっている。

しかし、日本では錠はなかなか広まらず、本格的な生産が始まるのは江戸時代になってからである。戦国時代が終わり、刀鍛冶や鎧職人が職を失ったことが契機になったと思われる。一部の例外として、「土佐錠」や「阿波錠」といった鍵を回転させるタイプの南京錠がつくれ、蔵やタンスには作りつけの錠が登場する。また、開け方を知らないと空砲がとどろく「からくり錠」もお目見えする。だが、錠の主流は野々上遺跡で発見された「海老錠」と同じ旋錠機構が踏襲され、鍛金、彫金などの技術を取り込み、むしろ装飾としての価値を高めていった。

かつて日本では周囲の目が錠の役を果たし、住居の生け垣も侵入を防ぐものではなかった。境界を示せば誰も入ってこないという国民性は、現代のお花見の場所取りまで続いている。錠が本格的な発展をとげなかったのは、ある意味では恵まれた環境にあるということかもしれない。

明治から昭和の錠

明治になると欧米諸国から錠が輸入され始め、日本古来の錠作りは姿を消してしまう。しかし需要の増大に応じて、大正期には国内でも欧米風の錠の生産がスタートする。この頃には一般家庭の家屋にも錠が普及し始め日本独自の錠作りも始まるが、ほとんどが扉の内側でねじを回して鍵をかけるもので、夜間に安眠することを目的としていたようだ。

錠の生産は太平洋戦争の勃発とともに止まる。しかし、戦後の復興、工業化社会の実現に向けて大都市の人口が急速に膨らみ、昭和30年代には団地、アパートといった集合住宅が

次々に建設され、錠の生産は飛躍的な伸びを見せた。

この時期、錠メーカーは操作が簡単な「円筒錠（シリンドリカルロック）」を導入した。これはノブの真ん中にあるボタンを押して扉を閉めれば施錠されるものである。住宅公団が「サムターン付シリンドラー面付き箱錠」を採用したことで、一般の集合住宅もこの方式になっていく。こうして日本に円筒錠が普及していった。

錠前のいまと未来

90年代に入ると錠の問題が一気に表面化した。特にここ数年は、アパートやマンションが次々に「ピッキング」による盗難の被害に遭っている。

このような背景もあり、最近では新しいタイプの錠が続々登場している。磁石の反発を利用した鍵、ICを内蔵している鍵を使用するもの、またカード、リモコン、暗証番号を鍵として使うものも作られている。

さらに、声や筆跡を鍵に使うための研究も行われている。また、指紋や網膜など人体の一部の特徴を鍵にする錠も開発され、一部実用化されている。それ以外にも、目の虹彩、耳、掌紋、指形、手の甲の血管の模様などを鍵とする試みがなされ、実用化に向けて研究が進められている。このような技術が一般家庭の錠に応用されれば、従来のように持ち歩く鍵はいらなくなるだろう。このような日が来るのも、そう遠くないのかもしれない。

参考文献

「鍵穴から見たヨーロッパ」 浜本隆志(中公新書)

「鍵と錠の世界」 赤松征夫(彰国社)

「鍵のかたち・錠のふしぎ」 INAXギャラリー名古屋企画委員会

取材協力・写真提供
堀商店